

る。しかし付属のシェードガイドを用いて、隣在歯や対合歯などを考慮し、肉眼による比色法を用いて色調を選択してみても、シェードの選択が難しく色調が再現出来ない場合も多くみられる。この原因として付属シェードガイドの材質、表面の滑沢度、光透過性の違い、背景色の影響等が考えられる。今回我々は、可視光線重合レジン修復における、比色法による色調選択に際して、色差計を用いて検討した。

実験方法

1. 市販レジンのシェードガイド 5 種と抜去歯牙の歯頸部付近の色調を色差計を用いて測定し、最も歯牙に近似した色調を決定した。
2. 抜去歯牙に V 級レジン窩洞を形成後、被験者らによって各シェードガイドから比色法により色調を決定した。

3. 上記 1. 2. により選択された色調の色彩学的検討を行った。

結 果

1. 色調選択において色差計を用いて色差値を算出して色調適合をはかった場合、シェードの材質や背景色の影響を受けるのでこの点を考慮に置いて色調の選択をはからなければいけない。
2. シェードガイドは充填されるコンポジットレジンと同じ材質がよく、また明度、彩度等に配慮して配列されたものが色調選択において良好な結果が得られることが判明した。

今後は、サンプル数を増やし、より詳細な検討を行っていく予定です。

7. (教育) 保存修復学実習に関する検討 — 鑄造修復物の制作時における鑄造欠陥について —

野田晃宏，荊木裕司，藤田芙美恵
小出賢治，川上智史，松田浩一
(歯科保存Ⅱ)

(緒言) 歯学教育において模型実習は、臨床予備実習、臨床実習の前段階として非常に重要な位置を占めている。その中で、最も頻度の高い実習は、鑄造修復に関するものである。この実習において、その成功を大きく左右する要因に、鑄造時における鑄造欠陥の発生の有無があり、今回我々は、本講座における平成 2 年度、3 年度の 4 年時の鑄造修復実習において発生する鑄造欠陥の現状を調査し検討した。

(調査対象) 本学歯学部平成 2 年度、3 年度の第 4 学年、それぞれ、91 名、85 名、尚、第 4 学年の実習を複数回経験している者と実習未終了者については、調査対象から除外した。

(方法) 観察に当たっては鑄造後のインレー体を 10 分間酸洗いし、その後肉眼と実体顕微鏡により判定、欠陥のあるものは写真撮影を行った。

(結果) 平成 2 年度と 3 年度の鑄造欠陥の発生頻度に

おいて、2 年度より 3 年度の方がそれぞれの鑄造欠陥において若干低い結果が出た。(鑄込み不足：13.2%と、8.2%，突起：20.9%と 20.0%，総鑄造欠陥率 45.0%と 40.0%)

(まとめ) 鑄造欠陥が生じる主な原因は、全行程において鑄造に関する理論の不十分な理解と、手技の未熟によるもの、また、本学鑄造設備の老朽化によるものと思われた。その対策としては、講義の理解度を高め、より早い時期から鑄造の一連の操作を行い、その機会を増やし、老朽化した鑄造設備の改善をはかる。それには、各講座でそれぞれ異なる方法で実施されている実習を統一された形で整理し効率的に行うことなどが考えられた。

(本講座においては) 実習の目的、目標の再設定、詳細な達成度の把握と学生の理解度の確認、教員の指導方法に関する評価を来年度より実習に導入し実施することを考えている。